

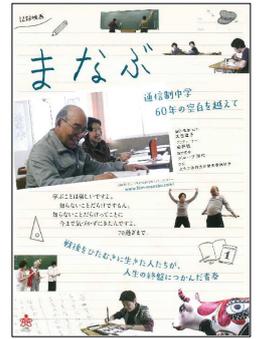


紫芳会だより ～輝く先輩達～

No.60
2017.10.1.発行

フリー映像ディレクター **太田 直子氏** (高校35期)

- 1987年 東京都立大学(現・首都大東京)人文学部教育学専攻卒業
都内女子高の非常勤講師、雑誌編集などを経て、映像制作へ
- 1992年 『教えられなかった戦争 マレー半島編』(映像文化協会)高岩仁監督助手
テレビ制作会社でニュースの特集などを制作するが、フリーに。
- 2010年 『月あかりの下で ある定時制高校の記憶』(グループ現代)監督
- 2016年 『まなぶ 通信制中学 60年の空白を越えて』(グループ現代)監督



◆◇『月あかりの下で』の文化庁 平成22年度 文化記録映画 優秀賞受賞に続き
『まなぶ』も平成29年度 同賞受賞の快挙を達成 ◇◇

この春、私が撮影・演出・ナレーターをつとめた記録映画『まなぶ 通信制中学 60年の空白を越えて』(製作:グループ現代)が公開されました。これは、戦後の混乱期、中学の義務教育を受けられなかった人たちが、年齢70歳、80歳を過ぎてからようやく辿り着いた学び舎、東京都千代田区立神田一橋中学校通信教育課程の物語です。

一家の大黒柱であった父親を戦争で失い、母親や弟妹を支えるために12歳で働かざるを得なかった人や、戦後の義務教育制度が始まってからも、貧困のため中学に行かせてもらえなかった人…。高齢の生徒さん一人一人に、一言では語ることのできない辛く悲しい時間がありました。だからこそ、60年たっても学び舎を求めてやってくるのです。

月に2回の面接授業に挑む生徒さんたちの、まるで10代の少女に戻ったかのような輝く笑顔。学ぶって楽しい！と全身で語るその姿にひかれ、私はビデオカメラを廻し続けました。

そして思いました。当たり前のように中学・高校・大学と進学し、目の前の勉強を「面倒くさい」と、幾度も怠けていた自分。学校に行くことは空気のように、そのありがたみを感じたことがあったらどうか…。学校で学ぶことの意味を、考えたことがあったらどうか…。

立高では、先輩の偉大さやできる同級生に圧倒され、自分は自分なりに生きるしかない、と開き直った気持ちで3年間過ごしました。1年生の担任だった国語の深澤邦弘先生がおっしゃった「駄目は駄目なりに(頑張ればよろしい)」が現在に至るまで座右の銘です。とにかく自分なりに、自分のことだけで精一杯の3年間でした。

しかしその限りなく自分本位な時間が、振り返るといまの私をつくってくれたのです。学ぶことの意味など考えることもなく、波のように押し寄せる行事にのまれ、応援団もバスケット部も周りの迷惑を考えずに時折自分勝手に休みながら、何とか続けました。勉強も受験とは関係なく、本多勝一氏の『中国の旅』や『殺される側の論理』など関心の向いた本を読み、「社会のことをもっと知りたい」と強く思うようになりました。

太田氏監督作品『まなぶ 通信制中学 60年の空白を越えて』(グループ現代)より

©グループ現代



峯永さん



宮城さんと峯永さん



卒業式

高校3年生の時、政治経済を担当して下さった沼野鹿之助先生との出会いが、その思いに拍車をかけます。先生は学徒出陣の経験者、授業の脱線話はほとんどが戦争のことでした。戦争の不条理、そして平和であることの尊さ。体調を崩されて1学期の間だけの授業でしたが「慢を捨てろ」という私たち立高生へのメッセージとともに、沼野先生の教えはいまも胸の奥にあります。

大学卒業後、社会科の教員を目指しましたが、途中で「もっと自分の知りたいことを追求したい」とドキュメンタリー制作の道へ進みました。自分にはまだまだ知らないことがたくさんある。常に謙虚な気持ちで、これからも自分と異なるたくさんの人と出会い、学んでいきたいです。

最後に。思う存分自分本位に生きられたからこそ、他者も含め、個人の尊厳を潰すような時代の空気には嫌悪感を覚えます。悲惨な戦争の後に私たちが得た日本国憲法の理念、国民主権、基本的人権の尊重、平和主義を決して手離してはならないと思います。

『まなぶ 通信制中学 60年の空白を越えて』はこちらからどうぞ <http://film-manabu.com/>